

結・たより, Vol.7

発行:神戸:ウイメンズ・シンクタンク・ユイ

1996.12.10. - 4p

請求記号:震災-6-z26

いよいよ、今年も残り少なくなってきました。今は木々も葉を落とし、静かに来春の芽吹きに備えています。「ユイ」の今年の活動は丁度今の季節の木々の営みに似ています。目に見える動きは静かでも、やがて花が咲き、実するという．．． できる事を、できる時に、できるだけ、やっていきましょう。 どうぞ皆さん、いい年を迎えられますように！

今号の内容は

- 会員の皆さんにお願いした アンケートの中間報告
- 9月15日「ユイ・トークサロン」の報告です。

アンケート回答の中間報告

震災が顕在化させた社会問題を、それぞれの体験や思いから検証していこうと、今年8月から9月にかけてアンケートを行いました。ユイ会員（昨年度の会員及び関係者も含む）を対象にアンケート票をお送りしたところ、33人（11月末現在）の方から貴重な回答が寄せられました。

単純集計を中心に中間報告をいたします。なお記述回答の内容など詳しくは、来春発行予定の「提言・レポート集」の誌上にまとめて報告しますので、ご了解ください。

ご参加・ご協力ありがとうございました。

回答者（33人）の平均年齢はほぼ40代後半

70代（1人）60代（4人）、50代（5人）、40代（10人）、30代（6人）、20代（2人）、無回答（5人）

現在同居の家族構成は

本人と配偶者と子ども（10人）、本人と配偶者（6人）、本人と配偶者と親（5人）、本人のみ（4人）、本人と子ども（2人）、本人と親（2人）、本人と配偶者と子どもと親（1人）、本人と兄弟と親（1人）、無回答（2人）

震災後住まいを移した人は8人（仮住まいを含む）

居住地	震災前	現在	動き
-----	-----	----	----

神戸市	17人	17人	4人が神戸市内転居、1人が仮住まい（仮設住宅）
西宮市	4人	4人	1人が仮住まい
宝塚市	2人	2人	宝塚→大阪、尼崎→宝塚
尼崎市	1人	0人	尼崎→宝塚
明石市	1人	1人	
姫路市	2人	2人	
三木市	1人	1人	
大阪市	1人	2人	宝塚→大阪
吹田市	1人	1人	
茨木市	1人	1人	
無回答	2人	2人	

現在の住まいの形態は

一戸建持家（11人）、分譲マンション（7人）、民間賃貸住宅（5人）、公的賃貸住宅（4人）、社宅・官舎（1人）、公共の仮設住宅（1人）、その他（2人）、無回答（2人）

職業を持つ人が85%

有職（28人）、無職（3人）、無回答（2人）

* 職業は、会社役員、会社員、団体職員、公務員、大学教員、保健婦、音楽講師、弁護士、翻訳者、カウンセラー、都市プランナー、建築士、ランドスケープアーキテクト、新聞記者などさまざま。

* 参加しているネットワークや活動は、女性問題、高齢社会問題、障害者支援、震災復興関連を中心に記入されたものだけでも約40件にのぼる。

* ユイに入会した動機は、震災復興・まちづくりの中で女性の視点の必要性を感じて、震災体験を無駄にしたい、ゆるやかに支え合うネットワークのあり方に引かれて、多様な意見を交換できる場と人とのつながりを求めて、住まい・コミュニティ・トータルな生き方を考えるためになど。

震災との関わりは（33人・複数回答）

- 電気やガスや水道や電話が止まった（27人）
- 家財に損傷があった（25人）
- 居住していた家屋が焼失・倒壊・損傷した（22人）
- 何らかの救援活動・復興支援活動に関わった（21人）
- 居住していた家屋から、別の場所へ一時避難した（10人）
- 親族や親しい友人・知人が亡くなった（8人）

- 本人または同居の家族の職場の建物が焼失・倒壊・損傷した（8人）
- 親族や親しい友人・知人が自宅に避難してきた（6人）
- 本人または同居の家族の職場の営業や雇用関係に影響があった（6人）
- 同居していた家族が亡くなった（1人）
- 本人または同居の家族が、入院の必要なけが・病気をした（1人）
- その他（1人）

家屋の被害は、

一部損壊（16人）、半壊（2人）、全壊（4人）

うち再建の目途がたっていない（1人）、処分あるいは退居して別の住宅に移った（3人）

* 家主に再建能力・意志がないため転居を余儀なくされた事例、高齢での住宅再建に対する悩みなどがある。いずれも生活の拠点が定まらないことが大きなストレスとなっている。

震災前の生活にほぼ戻ったと感じたのはいつ頃

一週間後（1人）、一ヶ月後（2人）、二ヶ月後（2人）、三ヶ月後（4人）、半年後（6人）、一年後（4人）、一年半後（2人）、まだ戻っていない（9人）、その他（2人）、無回答（1人）

* まだ戻っていないと回答した人の理由は、仮設暮らしが続いている、親友が仮住まいのまま、転居を考えている、被災者の物心の傷はいえていない、さら地が多い、本来の仕事の体制にもどれないなど。

* 震災後の時間経過にともなう生活や周囲の変化は、仕事と家庭生活の両面で描き出されている。当初の主として救援やライフラインの途絶への対処の様子から、時とともにそれぞれの人生（家族関係、友人関係、仕事、思想など）と震災と社会との関わりへの問い、疑問や葛藤へと焦点が移動していく様子がかうかがえる。

震災の影響で家族関係、住まい、仕事、地域コミュニティは

- 同居の家族構成や家族関係に変化があった（6人）
 - * 別居家族との関係にみぞができた、家族が協力しあう機会が増えた、親と同居へなど
- 住まいを移ったり、建て替えたりなどの変化があった（8人）、これからありそう（2人）
 - * 分譲マンションを手放し賃貸へ、二世帯住宅へ、再建能力格差や仮設住宅暮らしの不安の増大などの変化があげられている。
- 本人か同居の家族に、失業や転職や転勤などがあった（4人）
 - * 病気による役職変更、家族の解雇、退職の繰り上げ、大組織への絶望と小さな組織づくりへの取り組みなどの変化があげられている。
- 地域コミュニティとの関係に変化があった（17人）
 - * 一時的に地域の連帯感が強まった、地域との関係の必要を感じた。近所つきあいや地域活動が増えてきた、近隣関係にナーバスになり疲れる、近隣居住者が減り寂しい、仮設コミュニティの弱者増などがある一方で、地域とのつながりは希薄という声も多い。

社会の課題や、注目すべき動き、未来への提言など

* 住まいの安全性、居住の保障、住まいと人権、家族の心の問題、消費社会・ライフスタイルの再考、社会・都市構造の再考、税・社会保障システムの再考、地域福祉システム、ジェンダーと労働環境、住民参加のまちづくりシステム、災害救援・防災システムなど、生活を支える横断的な社会システムのあり方に関わる意見・提言が多数あげられている。（記述内容は、来春発行予定の「提言・レポート集」にまとめて掲載します） 以上

◇「ユイ・トークサロン」朴木佳緒留さんの研究報告『阪神大震災とジェンダー・バイアス』

9月15日、御影のレストラン「マリールイス」で、久しぶりに「ユイ」の集いを開きました。参加者は15人と少し寂しかったのですが、新しいメンバーの参加もあり、例のごとく尽きない話に時を忘れました。

朴木佳緒留さん（神戸大学発達科学部教授）が1995年9月、震災8ヶ月後に行ったアンケート調査（震災下で従来から存在してい男女の社会的性差、性差別が「仕事」と「生活」の中にどう現れてきたかを調べる）の結果に基づいて、具体的にていねいに震災と女性が抱えて問題を報告して下さいました。

「災害の記録だけでなく、社会を変える力になる記録を残すことが大切だと思ったので」という言葉がとても印象に残りました。

◇「提言・レポート集」の発行

寄稿のお願いをしましたところ、右記の方々が応募して下さいました。いよいよ、原稿書きにとりかかることになります。寄稿者のみなさん、お覚悟を！

応募は来年1月末まで受けつけます。

尼川洋子／石井布紀子／稲葉洋子
川畑真理子／後藤安子／田中道子
中川俱子／長谷川京子／林まゆみ
弘本由香里／朴木佳緒留／宗次康子
渡辺和美／陸田昭子

◆中川俱子さんの夫君、中川圭司様が去る10月22日にお亡くなりました。思いがけない訃報でした。ここに、謹んでお悔やみ申し上げます。